フードバリューチェーン in アフリカ

SHEP & CARD

西アフリカのセネガルでは、園芸作物（野菜や果樹など）と米、それぞれのフードバリューチェーンの構築を行っている。園芸作物の生産をビジネスとして成立させるSHEP（シェップ）、国産米の増産を目指すCARD（カード）、それぞれの現場を紹介したい。

文●松井健太郎

農家が市場関係者や小売店から販売価格などを聞き取る。栽培する作物の種類や時期などを決めるための貴重な経験になった

SHEPとは

市場志向型農業振興アプローチ（Smallholder Horticulture Empowerment & Promotion）。2006年からケニア農業省とJICAの技術協力プロジェクトで開発された、小規模園芸農家支援のアプローチ。「売るための農業」に転換するために、フードバリューチェーンを見据えた栽培と営農のスキル向上と所得の向上を目指す。現在、アフリカの23か国が実施しており、セネガルでは17年から技術協力プロジェクトを実施している。

人口増加によって園芸作物の消費が増え、小規模園芸農家にも「売るために作る」農業に向けた意識の変革が求められている。主食は米で、1人当たりの消費量は日本の約1.8倍。ただ、その多くを輸入に頼る現状を打開しようと国は国産米の増産に取り組んでいる。

Republic of Senegal

3 セネガル

国名	セネガル共和国
首都	ダカール
通貨	CFAフラン
人口	1,541万人（2016年 世銀）
公用語	フランス語（公用語）、ウォロフ語など各民族語

SHEPを導入し「売るための農業」へ

2000年以降、セネガルでは園芸作物（野菜や果樹など）の栽培が盛んになり、輸出や国内市場も拡大傾向にある。小規模園芸農家にとっても収入を増やすチャンスだが、収入は伸び悩んでいる。それは、農業をビジネスとして成り立たせるための計画性が十分ではないから――つまり、「売るための農業」ができていない現状があるからだ。そこで、セネガル政府は17年から「市場志向型農業振興アプローチ（SHEP）」を取り入れたプロジェクトを開始。国内園芸生産量の約6割を占めるニャイ地区を対象地域として、4グループ・120名の農家がSHEPに取り組んでいる。

農家はまず、自分たちが生産している作物の種類や販売価格、コストや利益など収支を把握する。その上で改善を図るのだが、重要な活動の一つとして行われているのが、農家自身による市場調査だ。作物の販売価格や売れ筋の作物などを市場関係者から直接聞き取り、どんな作物を栽培し、いくらで売ればもうかるかを自ら考えるという〝経営力を有する〟農家の育成を進めた。調査に出向いた農家の人たちは、「以前はバイヤーに売れ筋作物を尋ねることもなく、みんながおのおの収穫し市場で売っていたので、誰一人として満足のいく価格で販売できなかった」「今は市場の情報を確認してから計画、栽培をして収穫、販売をしています」と、農業をビジネスとしてとらえられるようになったことを喜んでいる。

また、「お見合いフォーラム」と呼ばれる、農家と園芸農業関係者の情報交換の場も設けられた。参加した農家は、「資機材業者やバイヤーと意見交換を行ったことで、どんな資機材業者が存在するのか、作物を誰に販売すべきかがわかりました。関係者との信頼関係を築けました」と話す。

SHEPの導入後、資材の投入、流通、販売といった各段階のバリューチェーンを見据えて生産に取り組むことで、収益性が向上するという良好な成果を得ている。

セネガルで製造された精米選別機。適切な運用指導を行うことで、品質の高い米の流通量増加を目指す

灌漑施設が改善された水田で栽培されるイネ。栽培技術のみならず、水路の維持管理の方法も農家が学び、実践している

CARDとは

2008年に開催された第4回アフリカ開発会議（TICAD Ⅳ）で日本政府が打ち出した、アフリカ稲作振興のための共同体（Coalition for African Rice Development）で、現在、23か国が参加。サブサハラ・アフリカの米生産を10年間で倍増させることを目標に、JICAが主導しつつ11の国際機関とともに取り組んでいる。生産だけでなく加工・流通・販売などフードバリューチェーンの各段階で付加価値を高めることを目指す。

CARDの目標である国産米の増産に向けて

米を主食とする国が多い西アフリカ地域でも、セネガルは有数の米消費国だ。ただ、人口の増加に国産米の生産が追いつかず、自給率は15年時点で約4割にとどまる。主食を輸入に頼ることを懸念したセネガル政府は09年から14年まで、国産米の倍増を目標とする「アフリカ稲作振興のための共同体（CARD）」の枠組みのなかで、国産米の多くを生産するセネガル川流域において生産性や収益性を改善するための「セネガル川流域灌漑地区生産性向上プロジェクト」に取り組んだ。

稲作の生産技術はもちろん、品質を高めるための精米機材の導入、農業機械の操作指導、灌漑施設の維持管理の技能向上など総合的なバックアップをJICAが行いながら、フードバリューチェーンを見据えた生産性の向上を進めた。その結果、対象地区における1ヘクタール当たりの収量は約17パーセント向上し、稲作農家の所得も20パーセント以上増えた。また、国産米の宣伝や精米品質の向上により、販売経路の拡大や流通量・販売量の増加も確認された。

この成功を受けて、16年からプロジェクトは次の局面に移り、他の灌漑地区にも広げられた。セネガル川灌漑稲作マスタープラン策定を推進し、農業サービスプロバイダー（精米業者、農業機械業者、修理業者など）のサービス向上に取り組んでいる。農家だけでなく民間セクターを引き入れる活動を強めて、バリューチェーンの強化を図っている。セネガル川流域は稲作に欠かせない水が豊富であり、国を挙げて自給率向上を目指しているため、増産のためのポテンシャルは高い。さらなる進展が期待されている。

右:「お見合いフォーラム」で市場関係者（資機材、種子、農薬、金融等を扱う業者）と意見交換を重ねて信頼関係を築く／左:農作業にかかる収入と支出の記帳の仕方を学ぶ女性たち。SHEPは夫婦を農家経営の一つのユニット（単位）としてとらえ、たがいに尊重し合いながら生活できる環境作りを行う